

「フィリピン研修 参加報告書」

京都大学大学院文学研究科修士1年 金 春喜

1 プログラム内容

本プログラムは、フィリピンや、フィリピンと日本の関係、また両国を移動する人々について理解を深めることのできるような、フィリピン国内の様々なフィールドに足を運び、学びを深めるものである。私たち参加学生は、かねてより、半年間の授業を通してフィリピンから日本へ移住する人々（とりわけ、その子どもをとりまく状況）について学び、また京都市内の中学校に通う JFC（フィリピンと日本の両国につながる子どもたち）に学習支援のボランティアを続けてきた上で、それぞれに問題意識を持ちながら、本プログラムに臨んだ。

フィリピンで過ごす1週間のプログラムにおいては実際に、複数の学校や、政府機関、NGO、福祉施設などに足を運び、各所で丁寧な説明を受けたほか、日本に住んだことのある、また、これから住もうとしているフィリピン人、あるいはフィリピン人の日本渡航を支援したり仲介したりする人々と交流を持つこともあった。また、移動中の車窓から見るマニラの日常生活の風景さえも、私たち参加学生にとっては真新しく思えるものばかりであった。こういった点からも、本プログラムで経験した1週間の期間は、そのすべてが学びであったと言える。

また、参加学生のすべてが、CFO（Commission for Filipino Overseas、海外居住フィリピン人委員会）でのプレゼンテーションを経験した。このプレゼンテーションは、日本に渡航する予定の女性たちと、CFOの職員たちに向けたものであり、私たちが用意した内容に対する彼ら彼女ら聴き手たちの応答からもまた、私たちは多くの示唆を得たと言える。

2 海外での経験および学習成果

私は、かねてより国家と家族・個人の関係に関心があり、本プログラムにおいても、そのような問題関心の視座から、多くを学んだ。幾度も訪問した CFO（Commission for Filipino Overseas、海外居住フィリピン人委員会）では、海外に移住しようとするフィリピン人やその家族が直面しうる苦難を少しでも軽減しようという政府機関の熱心な態度を見た。しかし他方で、こういったフィリピン側の努力を撥ねつけるような日本の状況に目を向けざるを得ないのも確かであった。日本とフィリピンの間に立ち、移民とかかわる立場にある日本人の人々の語りからは、日本の制度・法律には、フィリピンからの労働者が生き抜いていけないような多くの陥穽があり、移民やその家族が直面しうる困難は、まさにそこから生み出されうるということを学んだ。

そして、こういった国家の陥穽、あるいは国家間の陥穽によって、苦難を経験しうるのは、まぎれもない個人であるということも、このフィリピンの地で痛感することとなった。日本から帰国したフィリピン人女性を支援する NGO を訪問した際に私たちが出会ったのは、日本で出会った1人の人物を思って、涙しながら語る女性であった。一見、一個人と一個人の関係について流された涙のようで、しかし、彼女が生きるのは日本とフィリピンを取り巻く一国家を超えた大きな文脈の上であり、国家のありよう、あるいは国家と国家のありようによっては、彼女がこんなにまで悲しまないでよかった道もあったのかもしれないと、私は思わずにはいられなかった。私ごとではあるが、私にとっては、韓国から移住し、〈普通〉ならば流さなくてもよいはずの涙を、孫である私の前で流した祖母のことを、目の前で苦難を語るこのフィリピン人女性と重ね合わせることもとなり、一個人が生き抜こうとする人生に国家・国家間の陥穽のしわ寄せが及ぶこととなるこういった状況に、ひどく胸が締めつけられ

る思いであった。どのような国家・国家間の状況が背景にあれど、個人はその人生を、めいっばいに生き抜こうとしているのである。そういった実感の上で、個人や家族が経験しうる苦難を国家との結びつきの観点から丁寧に整理しながら、社会学を学ぶ学生として今後何をできるかについて考えを巡らせることが、今後私がすべきことであるというのを、強く感じるに至る経験であった。

3 進路への影響

私は修士課程修了後に自分が何をしているのかについて、はっきりと予想・構想できてはいない。しかし、今回のフィリピン研修を経て強く思ったのは、私という個人が国家を（乗り）越えることのできる進路を切り開きたいということである。そのために私は、自身のシティズンシップをめぐるあらゆる問題状況を整理しなければならないと言える。国家を越えようとしないうまま進んでいくなれば、それはさしあたり、ほとんどしなくてもよいことであつたし、だからこれまでも、ほったらかしにしてきた。けれども私が今、それをなんとかしたいと強く思うのは、今回のプログラムで出会った人々の抱える苦難に対し、強い共感を覚え、今後も考えていきたいと思うようになったからだと思う。自分自身の問題状況と向き合うことをした上で、あらゆる国家・国家間の陥穽のしわ寄せを被る人々の苦難を軽減することに、わずかであっても貢献できる方向性を探りたい。そういうことを、今は漠然とではありながらも、思っている。

謝辞

今回のフィリピン研修をめぐって、京都大学文学研究科国際交流推進室の職員の皆様、京都大学文学研究科社会学研究室の教員の方々、および関係各位に、深く感謝申し上げます。皆様には、〈普通の〉学生の渡航の場合ならばなくて済むような様々な手続きに、渡航直前まで、ご尽力いただきました。皆様のご協力なくして、フィリピンの地での深い学びはあり得ませんでした。こういった渡航前の手続きを含め、このフィリピン研修は、私にとってかけがえのない経験となったと思っています。本当にありがとうございました。